

原 克 『書物の図像学』 (三元社, 1993)

神 尾 達 之

神の死が宣告されたあと、空位となったその座につく権利は、つまり細部に宿る権利は、もはやロゴスとともにあるわけではないが、しかしロゴスを愛することを定められた文献学者が手にすることになるだろう。

枠組みから紹介したい。本書は著者（以下では、著者一般と『書物の図像学』の著者とを区別するために、後者を固有名詞で呼ぶことにする）が既に発表した四つの個別論文をベースにしており、それら四つの論文が四つの部を形づくっている。第一部と第三部は「まったくあらたに書き下ろしたもの」と断わられており、単発論文とこの二つの部を読み比べれば、大幅に増補改訂されたことが分るが、四つの論文と四つの部の表題がほぼ重なることから、個別論文と各章は対応しているように見える。書評にとっては周回的にすぎないように思われるいわば文献学的事実にこだわったのは、個別論文の発表時期と各部の順番が逆になっていることに、原の論述の巧まざる戦略を読んだからである。個別論文は、『変身』論（第四部）→『審判』論（第三部）→近代の著者像論（第二部）→図書館論（第一部）の順に発表された。原は各部が単なる作品解釈として読まれることを嫌ったのだろう。作品論として読まれかねない部分を最後に置いたのは賢明だった。しかも第三部と第四部はもはや、カフカの二つのテキストの個別的な考察ではない。原の眼差しは、カフカのテキストの表層にたゆたいながら、表層に留まり続けることで、間テキスト性の網の目を透視している。テキストの細部に潜む高密度の間テキスト性は、本書では、その細部を収容する書物の在り方一般を指示する。第一部（「炎上する図書館、あるいはふたりの凡庸な筆耕生……知の図像としての書物と図書館のイメージの変遷」）では、図書館の歴史が、太いがしかし濃やかな筆致で描かれ、第二部（「習字教本と処刑装置……近代の著者像の政治解剖学」）では、近代において、書く主体が権威（Autorität）を獲得して著者（Autor）として実体化し自立する過程が例証され、第三部（「書き物机とインク壺、あるいは蹉跌する文具たち……『審判』に見る、近代の著者の空間にはしる亀裂」）では、エクリチュールの物質的側面がカフカの『審判』を中心にしたテキスト群をてがかりに検証され、最後の第四部（「権力装置としての室内装飾……『変身』に見る、権力闘争と文字の体系」）で、書物と著者をめぐる問題構成が、権力という視座からの光を受けて立体化する。即ち論述の進行につれて原の視線は、歴史というマクロレベルから、テキスト群という下位レベルに下降し、そのさらに下位のミクロレベルとしての一つのテキスト及びそのテキストの細部へと焦点を絞りこんでゆき、最終的にはこの細部に全体の問題構成が現出する格好になっている。

さて、原はベンヤミンの『一方通行路』を水先案内人として、「〈書かれた知〉の隠喩としての書物の図像」の系譜をたどったのだが、我々も原の航路を跡付けることにしよう。

第一部は、エクリチュールによって固定された知の集積体としての図書館のイメージの変遷を扱う。「中世キリスト教における神の唯一者性は、神聖な書物である聖書の唯一者性」、あるいはその「独占的単数性」に重なっている。これは装丁という作業に端的にあらわれている。書物が書物たりうるためには、「散逸したもの、離ればなれになっているもの、矛盾するもの、異なったもの」が、一つの統一体へとまとめ上げられなければならない。原がクルツィウスを引いて言うように、「装丁は、すべての世界内容が神において統括されることの比喩である」。このような書物のイメージはさらにルネサンスの人文主義における自然という書物に引き継がれてゆくが、近代的自然科学が脱宗教化してゆくにつれて「自然の書物の単数性の権威が崩壊」する。自然に関する知が分化し、学問分野が複数化する。そしてスピノザの聖書批判や印刷術の普及がこの傾向を加速し、書物としての聖書の絶対的統一性が、学問的な書物たちの「相対的複数性」にとってかわられるようになるのだ。けれども複数化した知はそのままにしておけば、拡散するばかりで、真理への到達は困難になる。そこで「個別のディスクールをなんとか、まとめ上げなければという要請」が出てくる。この要請を実現するのが『百科全書』の試みだった。そこでは分散しかかっていた多様な学問分野が、一本の「系統樹」の形をとって体系化される。知は再び総体化されるのだ。ロマン主義に至って、この「普遍的知の総体性」は「あらゆる可能な書物を蔵する〈図書館〉」というノヴァーリス的なイメージへと結晶する。さて、ロマン主義の時代は同時に文献学の時代でもあった。今や知は「書かれたものと書かれたもののあいだで行き来する」ようになる。こうして図書館は「間-書物空間」へと変質するが、この流れは同時に、図書館と文献学と近代科学という三位一体の解体を予示してもいた。原はフロベール、マリネッティ、カネッティらのテキストを援用しながら、「十九世紀の学的象徴空間としての図書館」が崩壊していく様を活写する。知の「系統樹」の構築が決定的に破綻するのと並行するように、書物は有機的に組織された一つの空間であることをやめ、アフォーリズムやスケッチや資料ファイル群といった形態をとるようになり、ついには他のメディアによって、その特権的地位を脅かされるようになるだろう。

第二部は、近代的著者の誕生と死の過程を解析する。著者が著者として確立するためには、当然のことながら、著者はまず、内なる自我の所有者、あるいは一個の主体でなければならない。周知のように、十八世紀末から十九世紀初頭にかけてドイツ観念論は、人間を主体として位置づけるために、哲学的ディスクールを積み重ねたが、原は、この時期に書かれた筆記法の教本が、書くための所作の洗練・規範化と、流れるような筆跡を描く技術を繰り返し提言していることを指摘する。「途切れない筆記体」と「途切れない精神」とが「別しがたくもつれ」あうことで、書き手は「作品という言葉的コープスに、あますところなく意味論的統御を行き渡らせることができる」著者になる。しかしこのような著者の誕生を描いた小説であるホフマンの『牡猫ムルの人生観』は、当の著者の死を予め構造的に内包している。誕生時に既に死を抱え込んだ近代的著者像は、カフカに至っては、

「おのれの死をはらんだ読み手」になる。そこでは読み手は解読不能のテキストを前にして途方にくれるだけでなく、意味と想定されるものに到達することなく死んでゆくのである。カフカのテキストに見られる著者と読者の死は、「本来、異質なディスクールの系のからまりとしてしか成立してこないテキストに、意味の彼岸へ散逸してしまわないように束ねをかけようとする」近代文献学の、いわば解釈学的な欲望が最終的に無化したことを示唆している。結局、近代的著者像は「あらゆる意味論的細部を支配しうる」「幻像」にすぎない。

第一部と第二部でテキスト群は太いラインで結ばれていた。その方法は、形象群の個別性を一般性の中に回収しかねないものだった。後半の二部では、個別テキストの精緻な読解が、テキストの細部に先鋭化された形で凝縮しているエクリチュールの問題を析出する。まず第三部で原は、エクリチュールをめぐる形象群が問題化していく様を分析することによって、著者の没落過程に関するテーゼを側面から補強する。書き物机、驚ペン、インク壺といった近代の著者の生成にとって不可欠な文具類は、それぞれゲーテの『ドイツ避難民閑談集』、ジャン・パウルの『マリア・ヴッツ先生』、ニーチェの『オイフォーリオン断片』において、安定した透明な形象であることをやめ、カフカの『審判』で、それらを収容する空間そのものに亀裂が入るようになる。原の『審判』解釈において注目すべきことは、解釈者が個々の形象や作中人物の意味づけの一手手前で禁欲するという、つまり、形象や人物の意味を実体化した形で問わないということである。これは例えば、「Kは疲労するから書けないのではなくて、書けない空間に座るから疲労するのである」というような見方に端的にあらわれている。重要なことは、テキストを解釈する際のこのような視座のとりかたが、それ自体として見れば文学研究の方法として一般化しうるにもかかわらず、実は書物のエクリチュールの変質という問題と切り離せないということである。具体的に言おう。Kの執務室で繰り広げられ反復される細部が指し示しているのは、「文字化の揺らぎ」のイメージである。このイメージを、「伝記的作者の実像という上級審」を想定して一定の意味へと還元しないようにすることを、原は強調する。この細部のイメージたちは（もしかすると作者カフカの問題意識の射程の外で）、「〈書かれた知〉をめぐる十九世紀的ディスクールの大きな地殻変動に通底」しているのである。これは、Kの書き物机に帰属する電話・電気呼び鈴のスイッチ・書類収納スペースという三つの細部に明確に刻印されている。前二者は現前するコンテクストへの外部の暴力的な侵入を可能にする点において、脱中心化してしまう書く空間の系列に、後者は断片化され分類されるエクリチュールの系列に属するイメージである。原はこれ以外にもタイプライターの登場をカフカのテキストの特性と結びつけているが、新しいメディアの出現が、近代のディスクールが夢見ていた普遍的知の統合の試みを掘り崩してしまうのだ。

第四部は『変身』をてがかりにして、希薄化するエクリチュールの空間にかけられた権力の網を可視化する。トポロジカルな分析によって明らかになるのは、変身前のグレゴールの部屋に充満していた「欲望の追求と外部排除によるその占有」という「エーテル」が、「不可視の装置」と化した監視システムによって、外部から徐々に侵犯されてゆくということである。それは「権力闘争におけるグレゴールの政治的死」と、「権力を体現し切った妹

の闘争マニュアル」の成功という形をとる。このような権力闘争の場の中に、エクリチュールの凶像（新聞・帳簿・速記術・フランス語・楽譜）が巻き込まれてゆく。グレゴールが死ぬと、彼の両親と妹はわざわざ三通の「欠勤届」を作成し、郊外に散歩に出かける。「郊外」とはしかし、純然たる外部空間ではない。それは「市街でありながら市街でなく、市街を囲繞する自然でありながらもはや自然ではない」空間である。外部と内部の闘争の後に三人が行う移動は、外部への解放ではないのだ。郊外への散歩は、「あらかじめプログラムされた疑似自然のネットワーク」の中を、移動させられることである。空間を牢獄と化する監視システムは今や室内空間に限定されない。それは遍在するようになる。原のカフカ論の独創性は、権力の問題が、カフカ研究のクリシェとなっている管理社会という概念に収束せずに、カフカ以前の書物の隠喩の系譜とリンクしているところにある。即ち、AutorがAutoritätを喪失し、エクリチュールの意味と称されるものを保障する最上級審が相対化される時、空位問題が生じるが、それが「日常的な力の競合としての権力の問題と奇妙に混交してしまう」ことが指摘される。『審判』に含まれるあの「掟の前」の挿話に言及することを、原が巧妙に避けていることにも留意しよう。今や「掟の前」では、研究者たちのエクリチュールが、解釈の「正しさ」の無根拠性の証明の「正しさ」を求めて戦い、その戦いの記録が野放図に堆積しているのだから、これは当然のことだろう。

カフカが立ちつくすところで原の航路も一旦消えるが、向かうべき方角は海図の上で「コンピューターのイメージ学」という名称を与えられている。原の予感を裏付けるようにJ.D. ボルターは、エレクトロニクス技術が、写本や印刷によって育て上げられた「とじられている」という感覚を崩壊させてゆくことを予言する。書物の物質性を支えている二枚の表紙（カヴァー）は、著者が主題をあますところなく論じ、カヴァーしようとするのに対応している¹⁾のだから、著者の死は書物の隠喩の終焉と等価であるはずだ。書物の凶像の最終的な形態は、今まで表紙の間に「意味」を閉じ込めようとしていた書き手が、フロッピーディスクの前で途方に暮れている姿である。ニューメディアの到来が喧伝される現在、BuchはBucheという根源に回帰しつつあるのだろう²⁾。隠喩としては書物や図書館は限りなく縮小し、様々な電子メディアにとってかわられることもほぼ確実だろう。その時我々読者は単なる消費者ではなく生産者となることができるだろう。だがこのようなオプティミズムは容易にペシミズムに転化する。なぜならば、カフカが見てしまったエクリチュールの空位を埋めるような決定的な権威が、もう二度と現れないことを我々は確信しなければならないからである。我々に残されているのは、いとうせいこうが『解体屋外伝』³⁾

-
- 1) J.D. ボルター（黒崎政男 他訳）：『ライティングスペース —電子テキスト時代のエクリチュール—』（産業図書、1994）。ボルターは「カヴァー」のないエクリチュールを実践もしている。同書は電子テキスト版でも出版されているが、そこでは著者自身が著作権の失効と読者によるテキストの無限増殖を宣言する。
 - 2) 例えばアンゼラム・キーファーの「焼き尽くされたブーヘンVII」の地名の背後には、システム化された殺戮と書物の死のイメージが共振している。
 - 3) いとうせいこう：『解体屋外伝』（講談社、1993）。ここでは脳にシステムというルビがふられる。

で描くように、他者の言語によって満たされつつ、それを無限に組み合わせていくことだけかもしれない。

解釈学的地平の手前で留まり、「描かれた細部どうしを、たがいに連動する関係性においてだけながめてゆく」という方法論の有効性は、いわばマイクロコスモスとなった細部の中に、細部を一つの関係性へと収斂させる歴史の力学が見えて来るかどうか、ということによって確認されるだろう。その意味で『書物の図像学』は成功した言説分析たりえている。あえて求めるとすれば、細部を偏愛せしめるエロスが感じられないのは残念だった。書物の隠喩を考察の対象にし、しかも『一方通行路』を案内人にしながら、そこに収められている「十三番」⁴⁾を引用しなかったのはなぜだろうか。ベンヤミンは或る手紙の中で、パリの国立図書館での仕事について報告している⁵⁾。そこで彼は、猥褻な図書が所蔵されている「地獄(Enfer)」と名付けられた特別室を、新たな「活動分野」として開拓した。「利用する権利」を獲得することが困難なこの特権的な空間でもまた、権力の問題とエクリチュールの問題が、エロスを媒介項にしてリンクしたのではなかったか…。だがしかし書評家こそ、著者の生成と没落の系譜を辿った書物を前にして、こう自問すべきなのかもしれない。「書評という形式そのものが、明らかにもう救われようがない」⁶⁾のではないか、と。

4) Walter Benjamin: Einbahnstraße. Frankfurt a.M. 1977, S.53-54.

5) Walter Benjamin: Briefe 2. Frankfurt a.M. 1978, S.668-669.

6) H. M. エンツェンスベルガー (石黒英男 他訳): 『ドイツはどこへ行く』 (晶文社, 1991) 107 頁。